

English Garden 第80話

"I have never wanted a subject."

William Somerset Maugham

「私は書くものの題材に困ったことはない」 ウィリアム・サマセット・モーム

今回は『人間の絆』『月と六ペンス』などの小説で知られるW.S.Maugham(1874-1965)を取り上げます。表題の言葉は、モームが一生涯のしめくくりの意味で64歳のときに出版した随筆集The Summing Up(しめくくり)の中からのものです。その言葉の前後をもう少し引用しましょう。

「私には一つの長所があった。書くものの題材に困ったことがないということである。...書きたくても書くものがないという作家の悩みをよく聞くが... 私はそんな窮地におちいったことはない... どんな人とも1時間一緒にいれば、読むにたえる物語の材料をとにかく一つくらいは引き出すことができる... といいたいほどなのだ(I am almost inclined to say that I could not spend an hour in anyone's company without getting the material to write at least a readable story about him.)」

彼は人間に強い興味を持ち、「自分は想像力が乏しいから生きている人々を 作品の中に持ち込むのだ」といっています。その言葉通りに、百編を超える短編小説にはさまざまな人物が登場します。短編集"Cosmopolitans(コスモポリタンズ)"もそのよい例です。これはアメリカの月刊雑誌"Cosmopolitan Magazine"に1924年から29年まで発表されたもので、見開きの2ページにちょうど収まるように、大多数の作品が簡潔に手際よくまとめられています。その中の一つ"Mr. Know-All(物知りやさん)"をご紹介します。

主人公の「私」は サンフランシスコから横浜までの14日間の船旅で ケラーダという人物と同室となり、落ち込んだ。この印象の悪い名前の持ち主は たいへんな物知りだが、人の気持ちに無頓着で、おせっかいでおしゃべりで、いつも食卓の話題を独占したがる。ある日食卓での話題が日本の養殖真珠のことになったとき、彼は、実はこれからその調査に行くところだと、ここぞとばかり真珠についてまくし立てたので、彼に反感を持つラムゼイと論争になった。ラムゼイは神戸の医者だが、1年ほどニューヨークに里帰りしていた夫人を連れて 任地に戻るところだった。そして議論のゆきがかりから、夫人のつけていた真珠のネックレスの真偽について100ドルの賭けが行われることになった。ケラーダは少なくとも1万5,000ドルはする逸品だと保証し、ラムゼイは「18ドルで妻がニューヨークのデパートで買ったというものだ」と主張する。ケラーダが手にとって鑑定してみるとまさしく本物で、勝ちを宣言しようとした瞬間、いまにも失神しそうな夫人の青い顔が目に入った。彼は当惑しながらも、自分がまちがっていたと敗北宣言をしたのである

「私はケラーダ氏が好きではなかった(I didn't like Mr. Kelada.)」と作者は繰り返し書きながら、騒々しいケラーダの話し振りやしぐさを描写してクライマックスの真珠の鑑定シーンに向かいます。拡大鏡を手にして勝ち誇った顔のケラーダが どんな勝利宣言をするかと固唾をのんだその一瞬、状況は急転するのです。彼は窮地におちいった人妻を救うため、犠牲になる決心をしたのでした。これ以来「私」はケラーダ氏がそんなにきらいではなくになりました。翌朝、部屋のドアの下から差出人の名前のないケラーダ宛ての封筒が差し込まれました。中には100ドル紙幣が入っていました。私が「真珠は本物だったのですか」とたずねると、彼は「もし私にかわいい妻がいたら、一人でニューヨークに住ませるようなことはしないね」といいながら封筒をずたずたに引き裂き、紙幣はていねいに財布に収めました。くやしさをにじませながらもどこか滑稽なケラーダの言葉や動作と「私」のさりげない思いやりの交錯する結末は、なかなか味わいがあります。

(次回に続く)

